

昭和9年2月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5/2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋市狂言共同社
印刷所
株式会社地上社 電話1196

狂言人語

共同社同人

梅花ほころび初め、二月の寒風の内に
も早春の訪れを感じ初める今日此頃で
す。激しき木枯の内にも春の息吹きは
そこ此処に見られます。

まづまづ善竹弥五郎翁の朝日賞受賞を
心からお喜び申し上げます来るべき春
のさきがけを告げたものとして狂言
界、能楽界の為喜びに耐えません。

三月には名匠鑑賞能が能楽殿で又中日
五流能が文化会館で開催され、最高の
スタッフによる最良の演能が鑑賞され
ます事は心嬉しい春の訪れです。

我が狂言界も此春から夏にかけて野村
又三郎氏のやるまい会、七月の第六回
朝日狂言会、秋には十一月の和泉会、
同じく中日名人狂言会と多彩な計画が
あり稀曲大山を揃えて華やかな舞台を
くりひろげる事でしょう。

御同好の皆様方の熱意ある御援助を心
からお願ひして今後の発展を望みたい
ものでございます。

二月の催能

二月二日 宝生属託会

二月九日 梅鶴会

梅木 梅若猶義 宝生弥一

能 羽衣 梅若猶義 宝生弥一

能 細綱 茂山七五三 木村正雄

能 安達原 梅若猶義 宝生弥一

二月十六日 観世会

能 屋島 木原康次 高安滋郎

能 羽衣 観世元正 森 茂好

能 鞍馬天狗 観世喜之 西村欽也

能 佐藤卯三郎

能 井上松次郎

能 入間川 井上松次郎 佐藤 秀雄

二月二十三日 たなびき会

狂言解説

入間川 東国方の大名訴訟相叶い太郎
冠者を供につれて京より本國へ帰る。

入間の在で川の渡り瀬を聞く、瀬が交
つたと聞かされたものの入間の何某か
らフツと入間言葉の思い出してそのま
ま其処を渡つてズブぬれとなる。成敗
するときはつたものの入間様ですかさ
れてすつかり興がのつて太刀、刀、小
袖まで与えてしまった、さてどうして
とり返すか。

狂言弁当

野村 広二

一月は朗報があつた。善竹(ぜんち
く、旧姓茂山)弥五郎翁が朝日賞を受
けたことである。狂言界、能楽界のた

めにも、本年最初の「い」話題であ
つた。次は三宅藤九郎氏がこの二月に
ワシントン大学客員教授として渡米の
由。野村万蔵とともに同氏の活躍は大
きかろう。演能では、放送で「末広」
「松樫」「福の神」「素袍落」「千鳥
」がでる(NHK)故片岡信一追善能
では、「仁王」(保之、卯三郎)の、
少しはなれて仁王をくすぐる仕方が、
狂言の表現方法としておもしろかつ
た。能は「自然居士」(豊島弥左エ
門)と「江口」(金剛巖)。どちらも
、正月早々、東西に喧伝しうるにたる
舞台だつた。催主片岡道子君は「郎
耶」。「望月」で器ができ、「舟弁慶」
でわざをみせ、この能では味がでてい
た。これからの修業の難コース。片岡
君の前途に多幸を祈りたいとおもう。

今年の歌会始は

「紙」(川田順作詞、梅若六郎作曲)
には、「美濃、伊勢、三河の女達、紙
すくわざを始めたり云々」と、この地
方をはじめのところによみこまれてい
る。また、一月四日、芸能史研究会会
員一行(林屋辰三郎教授ほか十六名)
がはるばる奥三河の「花まつり」調査
に来県、山深い東栄町に入り、夜を徹
しての見学と資料収集。その総合的調
査は、夏から秋にかけ、日本学術会議

の報告をはじめ、個々の発表と、大き
な成果となつてあらわれよう(毎日、
一月十六日夕刊に林屋教授見学記の
る)。名古屋タイムズの連載小説「西
川鯉三郎」(戸羽三十作、鷺野栄万蔵
画)の初代鯉三郎と能のことは別の機
会にゆづるとして、本では、新刊「能
面史研究序説」(後藤淑)が熱田神宮
の呪師猿染にふれ、「金剛」(六〇号)
が「世阿弥生誕は康安元年か」(篠田
嘉一郎、「文学」三八年一〇月号表章
発表関連)をのせる。学燈(三八年一
二月)の巻頭を飾る「世阿弥の能」(白
洲正子)もおもしろいし、「芸術生活」
(二月号)の吉越立雄氏の能のカラー
写真も美しい。二月は猶義三番能があ
る。期待したい。

竹の雪と藍染川

西村 弘敬

一月の宝生会に珍らしく竹の雪が上
演せられた、この曲と藍染川とは曲の
構成の上でよく似ている処がある。竹
の雪は、現在宝生流と喜多流とにあつ
て、外の流儀にはない様である。また
藍染川は観世にあるが宝生にはない。
そこで似ている点というのは、第一に
両曲とも現在物に属していること、第
二に継母(ままはは)や邪慳(じやけ
ん)な婦人の様な憎まれ役をいづれも
狂言師の役にしてあること、第三に竹
の雪の方では、一旦凍死した子月若
を、竹林の七賢が憐んでこれを再び婆
婆(しやば)に蘇生せしめたこと。ま

た藍染川の方では是も一旦入水自殺をした仕手の母親を神主が神に祈誓を籠めて、これを蘇生せしめたことで、而も山ともに死者を蘇生せしめる様になつてゐること。第四には脇役の父親は、全然知らぬ間の出来事にて、帰宅して後に事の顛末を知り、これには自己もその一部の責のあることを悟り、その不明、不都合を謝て歎くという筋合であつて、これ等のことを比較して見ると、いろいろ似通つている点がある様に思われる。私の流儀にはこの両曲とも話も能もあるので、大体比較して見ると、謡としては竹の雪の方が文章、節付も勝れており、情味も豊かである様に思われる。とに角にこれ等は稀曲であつて、余り度々見る機会に接し難いのに、適々竹の雪が上演せられたので、思いついたまま駄筆を弄した次第である。

狂言について①

H

生

先般偶然の機会から入手した「国語と国文学」昭和二年第四卷第十一号橋純一氏の文中に狂言の生育について誰の手で生育したかを左の通り語つておられるのを興味深く読んだ。

「武士階級の子として生れたのであるが平民階級の子として生れたのであるうか……」と云う疑問にたいして「狂言の本質上どうしても平民の育成した芸術でなければならぬと断定する。そして平民のどの部分に受胎されたかと問はれた場合、私は平民（農工商を含

めて）の中、主として商民の階級に於て受胎されたものと答える。蓋し商民階級は農工階級よりずつと近世に至つて階級を形成した民衆であつて、当時にあつては大部分にのみ見られる階級であつたらう、それ故狂言を一貫してゐるものは商民意識であり都会意識である。而して都会商民の特質は新興階級として快活元氣な氣質の持主であり社会生活に対する自由公平な批判者たるに在るやう云う商民の立場から周囲の生活の矛盾をわらい、殊に其生活様式の既に化石しかけてゐる武士、僧侶、山伏等の生活を戯画化したものが狂言である」と意見を述べて居られる。そして狂言の笑の本質について「現代の高級な喜劇(?)は人物個々の性格の上に而して其個性から必然的に導き出される事件の上に滑稽を見出さんとするのであるが、狂言は人物の個性というものには殆ど些の関心を持つて居らず、ただその人物の所謂「氣質」というもののみ見ている」即ち狂言の人物は類型的職業上の氣質を正説的か又は逆説的筆法で滑稽的に表現するということでしょうか、

三月の予定

- 三月一日 九草会
- 能 巴 森川みどり
- 能 佐藤秀雄
- 能 熊野 有本淳子
- 狂 腥物 井上松次郎 井上祐一
- 三月八 柳水青陽会
- 能 野 佐藤太俊

- 能 俊寛 塚本秀雄
- 能 胡蝶 加藤丈太郎
- 三月十五日 名匠鑑賞会
- 能 田村 野口録久 辰巳孝
- 能 羽衣 宝生九郎 高安滋郎
- 能 望月 宝生英雄 高安滋郎
- 能 野村三郎 佐藤卯三郎
- 狂 末広 野村又三郎 井上松次郎
- 能 清経 菊屋 稔
- 能 羽衣 三村恵子
- 能 通小町 関下藤平
- 三月二十二日 邦語会
- 三月二十九日 中日五流能 文化講堂
- 能 鉢木 宝生九郎 松本謙三
- 能 井筒 佐藤卯三郎 井上松次郎
- 能 黒塚 後藤得三 高安滋郎
- 狂 へんじやく 茂山七五三
- 能 景清 観世鉄之丞 松本謙三
- 能 百萬 金剛巖 久保田亘亮
- 能 石橋 校間 竜馬 錦木峯男
- 能 本田 秀男
- 狂 鈍太郎 茂山千五郎 善竹忠一郎
- 三月二十九日 壺泉会
- 能 國 柄 市野龜太郎
- 能 小野鳥三郎
- 能 半 野村又三郎 井上礼之助
- 能 半 野村又三郎
- 能 半 鈴木公子
- 能 安宅 佐藤豊次
- 能 野村又三郎 井上松次郎
- 能 野村又三郎 野村又三郎
- 能 野村又三郎 大野 弘之
- 能 岩田幸子 能 竹内社中

お披露のおしらせ

東京お茶の水女子大学古川久先生から先月号アンケートについて御懇篤なる御指示御激励を頂き又此小誌の微力を御認め頂いて感激しております。誌上を借りて今後の御、力をお願いするものであります。

石田特許事務所

士 理 学 士 石 田 弁 法

名古屋市昭和区都島町2の10 TEL (88) 1 3 3 0

狂言

狂言人語

共同社同人

暖冬と云はれ乍ら矢張り烈風と雪がお名残の寒さをもたらし冬らしい天候が続いた昨今でしたが、二月堂のお水取につづいて彼岸が近づきすつかり春らしい今日此頃となりました『陽光山野に映えて春の近きを知る 五輪の競技に国威の宣揚を願ふ』と誰かが述べておられます。伝統芸術狂言の舞台も又競演火花を散らす春となります。「扁雀」「鈍太郎」「末広」を初めとして次々と「樋ノ酒」「若菜」「二千石」「張鶴」等が登場する予定です、御期待下さい。

三月の催能

- 三月一日 九華会 午前十時
 - 能 巴 森川みどり 西村 欽也
 - 能 熊野 有本 淳子 高安 滋郎
 - 能 肥後 井上松次郎 佐藤卯三郎
- 三月八日 掬水青陽会
 - 能 敦盛 佐藤太俊 西村 欽也
 - 能 胡蝶 加藤丈太郎 高安 滋郎
 - 能 葵上 塚本秀雄 高安 滋郎
 - 能 毘布売 佐藤卯三郎 井上松次郎

三月十五日

名匠鑑賞能

- 能 田村 野口 禄久 西村 欽也
- 能 羽衣 宝生九郎 高安 滋郎
- 能 望月 宝生英雄 高安 滋郎
- 能 末広 野村又三郎 井上松次郎
- 能 清経 刈屋 稔 高安 滋郎
- 能 羽衣 三村 恵子 高安 滋郎
- 能 通小町 間下 藤平 西村 欽也
- 能 飛越 野村又三郎 佐藤卯三郎
- 能 三月二十九日 中日五流能 文化講堂
 - 能 鉢木 宝生九郎 松本 謙三
 - 能 井筒 観世喜之 久保田 亘亮
 - 能 黒塚 後藤 得三 高安 滋郎
 - 能 へんじやく 茂山 七五三 茂山 千之丞
- 能 景清 観世鉄之丞 松本 謙三
- 能 百萬金 剛 巖 久保田 亘亮
- 能 石橋 桜間 竜馬 鶴木 峯男
- 能 鈍太郎 茂山 千五郎 善竹 忠一郎
- 能 三月二十九日 童泉会 午前九時
 - 能 国 栖 市野 健太郎 福王 茂十郎
 - 能 半部 野村又三郎 井上 礼之助
 - 能 安宅 鈴木 公子 高安 滋郎

昭和33年3月1日発行
 発行所
 名古屋市中区栄門前町5-2
 井上重兵衛 電話1480
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1196

「狂言解説」

野村又三 井上松次郎
 野村又三郎 大野 弘之
 野村又三 井上松次郎
 野村又三郎 大野 弘之

肥後 包に入れた黄金造りの刀を肥後物と云えと云われた太郎冠者。スツパに「之は黄金造りの刀ではなさい 肥後物ぢや」と云った斗りに刀を捕られてきてどうして取り返すか？

毘布売 若狭の毘布売路上にて大名に逢ふ、自身太刀を持った大名強引に毘布売に太刀を持たせ、家来の如く毘布売を扱ふ、恐った毘布売は太刀を抜いて散々大名をなぶる。

末広 正月のおせちに末広を買いに都へ使に出された太郎冠者、スツパにだまされて傘を売付けられる。扱其結末は、お目出度い狂言として余りにも有名な曲。

へんじやく 茂山兄弟による新作品 言扁雀とは支那の名医の名前。

鈍太郎 上京下京に女を持つ鈍太郎の二人の女を如何に扱うか、手車にのつて退場する鈍太郎のしたり顔 太刀奪 となまな太郎冠者、スツパに取られた太刀を取り返さんと散々苦勞する。

狂言の用例

古川 久

狂言という言葉は、もとより中国から入つて来た漢語であるが、鎌倉時代の末ごろから当時の猿楽芸の分類を指すものとなつた。なかなか明らかにし難い、狂言の発生を探るために、この

言葉の使用例を尋ねているが、近ごろ思いがけなく、『海道記』の中にあるのを知つた。

この書物は、いわゆる東海道の文学として最も古く、都の僧が鎌倉に下つて巡覽するが、故郷の母恋しく帰途につくという内容である。長く『方丈記』の作者鴨長明の作と伝えられて来たが、それは確証が得られず、ただ貞応二年（西紀一二三三）の成立とだけ知られる。従つて『平家物語』にも影響を与えたものと認められている。

狂言の用例は、その終りに近く作者が所感を述べるために、
 そもそもこれは羈中の景趣にあらず、存外の浅き狂言なり。

とある文中に見える。つまりこの記録は旅行の間に見た景色を、忠実に写したものでなく、思いの外につまらぬ狂言を連ねたわけだと言っているのである。これは作者の謙遜の辞であるが、同時に文学の虚構性を主張したものと見られよう。

有名な俳人芭蕉の『奥の細道』に対し、近ごろ随行者曾良の日記が発見され、事実と違ふ記載の多いことが、今さら問題にされている。しかしいやしくも文学である以上、狂言を述べるのは当然のことで、紀行は単なる旅行案内ではない。

この用例で思い出すのは、大蔵虎明の『童子草』に、「能は虚を衷にし、狂言は衷を虚にするなり。能は表、狂言は裏也。たがひにしらずんば、あし

かるべし」(四十八段)とある虚実論である。狂言という言葉は虚言に近く、それは喜劇などの語よりもずっと深い意味を含むと言うべきであろう。舞台芸術の一つに、この名をつけた人に敬意を捧げたい。(39・2・10)

狂言弁当

野村 広二

今年も二月に、能楽協会式能がおこなわれた。能五番、狂言四番。昨年にくらべて、シテ正面席に外人の顔の多いのが目立つ。狂言も能も、風格の高さに心たかぶる感激で終始。盆山(三宅右近、前日父の藤九郎が渡米で代役)、左近三郎(山本東次郎)、蝸牛(保之)、棒縛(善竹弥五郎、大藏弥太郎)のどれも楽しく、山本の僧がとてもし秀逸だったほかは、左近と「天鼓」の間の和田喜太郎に弥五郎翁の元気なすがたが印象にのこる。名古屋では、猶義独演三番能が二月の特記。せん細華麗な芸に線の太さ豪快さが味える、好ましい昨今の猶義。「安達原」の前シテは、人生の無常をみせて余りあるすばらしさであった。このときの「粗ない」だが、終りの方で、太郎冠者があたらしい主人の幼児のことを語るあたりは、むつかしくてしかも心から笑えない場面だと、いつも考える。また御園座の新猿之助の「黒塚」も大層おもしろかった。他方日本服飾美展では、徳川美術館の柳にまりの唐織や、関の春日神社の驚狩の衣、千五郎家の槍袋

の肩衣に金春編(長尾美術館)など人の目をうばっていた。本では「花と幽玄の世界、世阿弥」(白洲正子)、世阿弥のことにもふれる「無常」(唐木順三)をあげたい。三月は名匠鑑賞能と中日五流能。いよいよ春の演能もたけなわとなる。

狂言について(二)

此人物の階級判別について

「農工商の階級を判然弁明できるものは殆んどない」として「農民として明らかに表現されているものは「餅酒」等の年貢納を主件とした数番の外には「鎌腹」「どもり」「内沙汰」の三番、この外「竹の子」「横座」の如き題材の上からその人物が農民とみなし得るもの四五番であり、その外には都へ奉公に又は見物に買物に出る田舎者があるが農民とは断定出来ない。工人農民に至つては一層困難、工人階級としては塗師平六、塗付(早漆)の二番商人としては新市を題材にする「鍋八鉢」他の数番
行商人を題材にする「煎物」「柿」「合せ」等三四番、他は土農工のいづれでもなさそうだから多分農民であろうと考えられる程度で平民階級殊に商工階級の特色はすこぶるすくない。此の点大名や僧侶山伏等の階級性からくる独特の可笑味とは趣を異にする」と狂言の底流を成す社会意識からみて平民階級は凡庸で中性無色であるとし、狂言が平民階級の意識と同一水準にあり平民の優越感も幻滅も感ぜず擲

揄も試みていないとし、平民の要求により発生発達したものと断定したいと言われている。(後略)

四月の予告

- 四月五日 観劇会
 - 能 井筒 加藤歌子 西村欽也
 - 能 三輪 野村又三郎
 - 能 三輪 村田京子 高安滋郎
 - 能 三輪 井上松次郎
- 四月十二日 異会
 - 狂 福之神 河村丘造 佐藤秀雄
 - 能 四月十九日 観世会
 - 能 頼政 柴田初太郎 西村欽也
 - 能 桜川 佐藤秀雄
 - 能 殺生石 橋岡久共 高安滋郎
 - 能 殺生石 井上松次郎
 - 四月二十六日 掬水会
 - 狂 弱法師 柴田収武
 - 能 舟弁慶 西川真澄
 - 四月二十九日 幸友会
 - 一部
 - 能 弱法師 宝生英雄 豊島十郎
 - 能 道成寺 辰巳 孝 高安滋郎
 - 能 井上礼之助 井上祐一
 - 能 樋ノ酒 和泉保之 井上松次郎
 - 能 樋ノ酒 和泉保之 佐藤秀雄
 - 二部
 - 能 卒都婆小町 梅若六郎 豊島十郎
 - 能 土蜘蛛 梅若猶義 高安滋郎
 - 能 若菜 佐藤秀雄
 - 能 若菜 和泉保之 佐藤秀雄
 - 能 若菜 佐藤卯三郎 井上松次郎
 - 能 若菜 佐藤卯三郎 井上松次郎

編集後記

前月の本欄で古川先生の奉職先(東京女子大)を編集子の思慮いからお茶の水と間違えて先生には大変御迷惑をおかけしました。其の代りと云うと大変有難すぎる話ですが先生からはるばる玉稿を頂きましたかえつて恐縮しております。本欄を借りて厚く御礼申し上げます。

一点にても卸します

石原商会

昭和区川名本町6ノ39(石原総一朗)

電話 4735・3921

連絡先 河村丘造

営 業 品 目

- ダイヤ・貴 金 属
- ヒスイ・メキシコパール
- 真 珠・装 身 具 全 般

従 業 員 募 集

狂言

昭和九年四月一日発行
 発行所
 名古屋市中央区奥門前町5ノ2
 井上重兵衛 電話1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1196

狂言人語

共同社同人

陽春とは言う条、肌寒い風に桜のつぼみも遠慮し勝ちの今日此頃となりました。去る三月号の締切の日、在米中の野村万蔵師より玉稿を頂きましたのでおそまき乍ら本紙上にのせさせて頂きました。

四月の催能

四月五日 観衡会

能 井筒 加藤歌子 西村欽也

能 三輪 野村又三郎

能 村田京子 高安滋郎

能 井上松次郎

狂 福之神 佐藤卯三郎 井上礼之助 佐藤秀雄

四月十二日 巽会

能 四月十九日 観世会

能 頼政 柴田初太郎 西村欽也

能 桜川 佐藤秀雄

能 殺生石 大槻秀夫 高安滋郎

能 井上松次郎 高安滋郎

能 井上松次郎 井上祐一 佐藤秀雄

四月二十六日 掬水会

能 弱法師 柴田牧武

能 佐藤秀雄

能 舟弁慶 西川真澄

能 醉後 井上祐一 佐藤友彦

四月二十九日 幸友会

能 弱法師 室生英雄 豊島十郎

能 道成寺 辰巳 孝 高安滋郎

能 井上礼之助 井上祐一

能 種酒 和泉保之 井上松次郎 佐藤秀雄

二部

能 卒都婆小町 梅若六郎 豊島十郎

能 土蜘蛛 梅若鶴義 高安滋郎

能 若菜 和泉保之 佐藤秀雄他

狂言解説

福之神||有徳人二人毎年欠かさず神前へ歩みを進ぶので福之神顕現し給い富貴になる道を教え玉うと云う目出度い狂言。

蝸牛||蝸牛は不老長寿の薬といわれ取りにやられたが、蝸牛を見た事もない太郎冠者、山伏に散々からかわれる。醉齋、酔売とはじめかみ売が一語になりお互に秀句を競う、秀句全盛の時代

で、「す」の字と「から」の字を縦横に使用するしやれた狂言です。

種ノ酒||留守に米 酒倉を預けられた太郎冠者、酒倉から米倉へ種をかけた酒盛を初める。

若菜||かいあみを供に野遊びに出た大名、若菜つみの大原女達と合流しのびのびした酒宴となる。春の野の情景ゆたかな若菜摘の様子、おおらかな室町風景を舞台に再現します。

アメリカ便り (一)

二月二十一日 シアトルニテ 野村万蔵

戦後名古屋市が、近代都市の建設に成功したことについて、思い出されるのは一関東大震災の時、後藤東京市長が企画された、都市計画案なるものが、大風呂敷と新聞紙上などでコキ下ろされて原案が骨抜きにされたことであります。終戦後の好機をも重ねて逸したわが東京都は現在非常な交通難にあえいでいるのです。

私は都当局の失敗を詰るよりはこの難事業をやり遂げた名古屋市の方々の決断力に対し絶賛と敬意を表したのであります。

旅行好きであつた私の父、萬斎は夏の閑散期にわれわれを連れて北海道九州方面を各年に巡演しましたが、やがて、朝鮮、満州、南支、北支まで足を伸ばすようになり、ある年には実に二ヶ月に余る大旅行を記録したのでした。

このような私共の旅行に対し、「野村は旅役者だ」と非難する者もありました。

したが、父はそんな陰口には耳を貸さず、積極的に狂言の普及行脚をつづけていたのでした。

一方新作狂言の上演、狂言稽古本の出版、劇場出勤、ラジオ放送等々に常に先駆者となつていたため、自然に風当たりが強く、仲間からいつも集中指弾をうけていたようです。しかし父は「新しい仕事には必ずしも迫害者が現れるものだ、今にみている」と言つて、少しの動揺の色も見せなかつた、その度量は実に立派なものでした。

また父は「一度何を渡つてから死にたい」と口癖のように言つていました。何とは、太平洋を意味するもので、言うまでもなく、米國巡演を念願していたのですが、これだけは果すことが出来ず、太平洋より更に遠い、三途の川へ針路を変えてしまつたのでした。

笑いと狂言 西村弘敬

感情には色々あつて、一口に喜怒哀楽といわれて、之れは一般の動物にも見られるが、人間には人間にだけしかない高等な感情がある。即ち可笑(おか)しい、恥かしい、美くしい、きれいな、きたないなど其の他にも色々である。其の中で笑うという動作は勿論人間特有のもので、此の笑いと狂言に關しては学問的に心理、医学、哲学上、夫れぞれの専門家の間で研究せられてゐる事と思われるが、吾々素人(しろうと)が極めて平凡に、極めて常

諷的に分類して見ても中々に種類がある様で、先づ第一に「ウワッハッハッ」と笑う愉快な笑い、次に「ウッフン」という思い出し笑い、次には「エッヘッヘ」という追従（ついしよう）笑ひ、「イッヒヒ」という軽蔑（けいべつ）笑ひ、まだまだ色々ある。そこで能楽の中には笑ひを誘（さそ）う様な場面は殆ど無い位であるが、狂言の方では狂言自体が人に笑ひを起させる様に出来て居る。世間で行はれて居る芝居では所々に笑ひを誘う場面もあり、殊に喜劇ともなれば狂言同様専ら笑ひを求める様な行き方で、又寄席（よせ）で行なわれて居る、落語などでは落語家の上手な話して笑わせる、近來はラジオ、テレビの普及で之れ等の諸芸も至極身近に見聞出来る様になつた。そこで之れ等の諸芸が人に笑ひを求める行き方を仔細に観察してみると、笑ひの上々なるものは、腹の底から思わず「ウッフン」と自然に笑ひがこみ上げて来る様なものでなければならぬ、即ち筋の上にも無理がなく、実世間で実際に有り得る事でも可笑し味がある自然に出来た事であれば本当の滑稽とは言われない。然るに実際には行われそうもない事、即ち不合理、不可能な事で実世間に有り得ない事をして見せて無理に笑ひを求める行き方即ち揶（くすぐり）の笑わせ方が此の頃のラジオ、テレビの大部を占めて居る様に思われ、又、狂言も之れを良く考えて振り返つて見ると、矢張り「くすぐり」の筋の物が大部あるように思われ

る。然しながら相当以前から行われて居る狂言に対し之れ等の不満をぶつて見ても今更何共致し方のない次第ではあるが、曲目の撰定に当つて幾分でも之れ等の点を心しておく事が望ましい。

狂言 弁当

野村 広三

三月の狂言は「末広」（野村又三郎、松次郎、秀雄、名匠鑑賞能）と「武悪」（東次郎、弥太郎、NHK）。「それお声じや」とか、「お大刀じや」という太郎冠者のことばは、いつ聞いても、時代をしのげ、語る場所も大事などころで、味わい深い。能は名匠鑑賞で前後の役者のかわる「田村」の前（野口緑久）がすぐれていた。「望月」（室生英雄）ではシテ力演にもかわからず、全体として整然としないところが一、二あつた。なを同氏の「屋島」（NHK）はとてもよかつた。三月までに「羽衣」が三人の役者で演ぜられたのもおもしろい。また名古屋で、能演展が前後して二カ所で行かれた。仙田雪山子えが「能野」と「小鍛冶」と「狸々」がわけても佳。片や花房英樹筆の「松風」は傑作で、その新境地を示していた。本では、「秀吉と利休」（野上弥生子）は能と茶道が全編タテ・ヨコの糸のようにとり扱われ、「聚落第の舞台」「明智討」「藤栄」とか奥松新九郎に、利久の妻の兄で能楽師鳥飼某が登場する。この「は、狂言の方では由緒のある姓

である。芸術生活（四月号）の「山田久福」（草柳大蔵）は小鼓を打つ方々に一読をおすすめしたい。ほかに新作能「鑑真和上」（土岐善磨・喜多実）が大法輪（三月号）にのる。四月は上旬伊勢神宮奉納、下旬「道成寺」（辰巳孝、福井啓次郎、井上祐一ほか）がまわれる。期待したい。

五月の予告

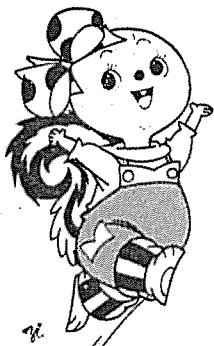
- 五月三日 久田観正会
- 小袖曾我 伊藤洋子
- 井上祐一 佐藤博子
- 俊寛 久田秀雄
- 井上松次郎
- 五月五日 大塚清風社
- 五月十日 霞会
- 五月十七日 観世流追善能
- 道明寺 武田太加志 高安滋郎
- 井上松次郎
- 松風 観世元正 宝生弥一
- 和泉保之
- 弱法師 大槻秀夫 宝生弥一
- 佐藤卯三郎
- 半能 融 柴田初太郎 西村欽也
- 狂 二千石 和泉保之 井上松次郎
- 五月二十四日 名古屋能楽倶楽部
- 五月三十一日 清韻会
- 殿島修二
- 面箱 井上祐一
- 三番叟 野村又三郎
- 養老 泉 嘉夫
- 定家 大槻秀夫
- 佐藤秀雄
- 望月 観世喜之
- 野村又三郎
- 張 蛸 佐藤 一郎
- 井上松次郎
- 井上礼之助

有利・安全な貯蓄...

安田の貸付信託

年7分3厘7毛 (5年もの) (5年想配当) ・1口1万円・元金保証

安田信託銀行 名古屋支店 納屋橋電停前・名宝東、(20) 2451



狂言

狂言人語

共同社

突然のように寒気を吹飛ばして暖風が吹込み桜が咲いたと思つたら雨々々の毎日が続き一度に新緑の初夏の風を吹込んだような此頃です。

狂言界も、活気を呈して善竹弥五郎翁の受賞、善竹襲名披露演能と、盛んに花を咲かせて、輝かしい奮闘をみせつけられ、又名古屋でも三月末の中日五流能に茂山千五郎氏一家の来演をみてその達者な芸に拍手を送りましたが四月末に催された福井師範十周年能の「種酒」「若菜」に和泉保之師の健在をまざまざとみて大いに意を強うしております。

五月は、新緑、若手の活躍を期待したい月です。

五月の催能

五月三日 久田観正会

能 小袖曾我 伊藤洋子

能 佐藤秀雄 佐藤博子

能 俊寛 久田秀雄

能 井上松次郎

能 盆山 井上礼之助

佐藤秀雄

五月十七日 観世物故者追善

能 道明寺 武田太加志

能 井上松次郎

能 松風 観世元正

能 和泉保之

能 弱法師 大槻秀夫

能 佐藤卯三郎

能 柴田初太郎

能 二干石 和泉保之 井上松次郎

五月二十四日

能 清経

能 遊行柳 岡田頼允

能 佐藤卯三郎

能 三井寺 植村真太郎

能 井上松次郎

能 竹生鳥参 佐藤友彦 佐藤秀雄

五月三十一日 清韻会大槻追善

能 翁 殿島修二 面箱 井上 祐一

能 養老 泉 嘉夫 千歳 野村又三郎

能 定家 大槻秀夫

能 望月 観世喜之

能 野村又三郎

能 張蛸 佐藤卯三郎

能 井上松次郎

能 盆山 井上礼之助

狂言解説

盆山 井上礼之助

を案内なしに借るうよ。込んだ男、主人に見とがめられ散々なぶられて鯛の真似までさせられるが鳴声までは：二千石 主家の先祖のおとめ謡となつている二千石の謡をふと口にした太郎冠者が折角の御機嫌をだいなしにする。

竹生鳥参 忍んで竹生鳥詣をした太郎冠者が主の恐りを秀句でなおそうとするが、くちなわでつまつて失敗する。張蛸 張蛸を買いにやられた太郎冠者、都でスツバにだまされて、張太鼓を求めてくる、さて大名の御きげんをいかにして直すか

アメリカ力便り (二)

野村 万藏

私の今回の渡米は以上のように計画的であつた父の場合とは違い、言わば偶発的な動機によるものですが、狂言の初渡米を私どもで記録したのも又、不思議な因縁と申されましよう。

私は戦後あらゆる日本芸能がアメリカに紹介されたにも拘らず、能の渡米問題がゆきなやんでいる現状を甚だ遺憾に思いますので、今回の渡米を機に、その線に沿つて私なりの努力はしてきましたが、それには先づ以つて狂言公演の成功が絶対必要であると考へた時益々責任の重大性を感じたのでした。過去三十数回に亘る米國各地の公演に於て、望外の好評を得たことはその意味で若干裨益するところがあつた

ものと、密かに自負している次第です。元來器用な性質の日本人は、外國の真似をすることも又極めて巧みであり戦後の日本は殊にアメリカ一辺倒になつていようです。

昔から「日本人の猿真似」と外人間に好ましくない定評があり、戦後も「フジャマ・ゲイシャガール」程度が彼れら大部分の日本観であります。

私は今回の渡米によつて、日本芸術の優越性につき、大きな誇りを感じたのでした。今後われわれは対外的に勇氣と自信をもつて、芸術國の実態を知らしめるための努力をする必要を痛感します。

草木の心

西村 弘敬

高砂の謡の「クリ」に「夫れ草木心なしとは申せども。花実の時を違へず」とあり、又その他の色々の謡の中に「心なき草木」などと、草や木には心のない様に盛に謡われている。然るに草木の精を主題としている能には「芭蕉」「杜若」「梅」「藤」「六浦の楓」「西行桜の桜」「遊行柳の柳」「老松の松」等があつて、何れも夫れ等の草木の精を人間の様に取扱つてゐるので、一体草木には心があり又無しやと禪問答めいた疑いも出てくるというものだ。

勿論科学の方では草や木に心即ち靈魂があるなどと、究められてはいないのだが、能の作者は是れ等の草や木に

も何となく心があるかの様に、優雅に作り出した考案には誠に面白いと思わせるものがある。然しながらもとも草木心なしという建て前を崩さずに、西行桜の謡の中に「非情無心の草木の花に浮世の科はあらじ」と謡はせてあるが、此の曲のシテに非常無心の桜の精を老人として現わして置きながら、前記の「非常無心の草木の、云々」と云わせてあるのは何となく一抹の矛盾を感じざるを得ないのである。兎に角に「草木国土悉有仏性」という仏教の教えから見て、非情無心の木石草芥の精を有情の人間の如くに仕立てて曲を構成した能作者の偉大なる抱擁力には只管敬服の外はない。

狂言 弁当 野村広二

三月末の中目五流能の新作狂言「へんじやく」。なんでも狂言になるが、どれも「狂言」であるとはい切れない。新作の世界もせまい。おなじとき「鈍太郎」を千五郎が好演した。この曲も結びがくどくていやである。晴れの場所故もつと狂言を大事にしていただきたい。次に、八十才の善竹弥五郎翁は朝日賞受賞記念で「枕物狂」を演じ、大きな注目をあびた。能では伊勢神宮金春奉納能の「八鳥」(本田秀男)と「三輪」(信高)がよかつた。なお、岐阜県では「能郷の能・狂言」を文書と映画で記録保存する由、その成果を期待したい。さて今年にはシェイクスピア生誕四〇〇年にあたるが、四月

二十三日に生れ、そしておなじ日に他界のこの大文豪は、世阿弥とちがつて、生れた日は推定。イギリスでは、諸行事が、これもおなじく、死後三〇〇年のときにくらべてなかなか多彩。中野好夫氏の「マクベスと道成寺」の二頁はまことに印象深い(学燈三月号)。またシェイクスピア資料として「図書」(四月号)の一〇円は安くて内容充実。「世阿弥」の普及にまねてみたいことの一つ。本では、「ペンタローネの姿、枕物狂」(ベニト・オルトラーニ筆、朝日ジャーナル四・一九号)がおもしろいし、添えられた写真も見事。新井勝利画の「みやこ鳥」(週刊朝日五・一号)紹介も楽しかつた。五月は観世流物故者追善能が催される。故人の冥福と盛会を祈りたい。

六月の予告

- 六月五日 熱田神宮奉納 囃子他数番
- 小舞 貝尽し 井上松次郎
- 六月七日 青陽会 忠 度 久田秀雄 井上礼之助
- 富土太鼓 佐藤太俊
- 舟弁慶 上田照也
- 謀生種 井上松次郎 大野弘之
- 六月十三日 一謡会 鐘 廬 河村鉦二 佐藤秀雄
- 十八 佐藤卯三郎 佐藤友彦

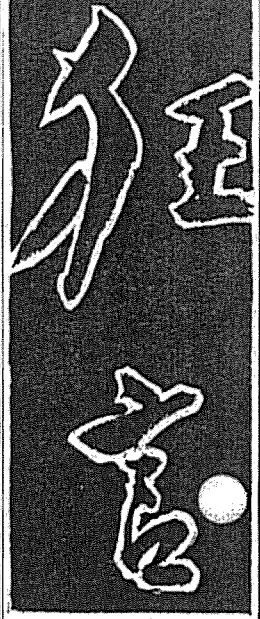
六月十四日 本田秀男来名四十年

- 能 帖 本田秀男 佐藤秀雄
 - 舟弁慶 橋岡竜馬 井上礼之助
 - 三人片輪 河村 丘造 佐藤卯三郎 井上松次郎
 - 六月二十日 やるまい会 釣 針 野村又三郎 佐藤卯三郎
 - 陰 狸 野村万作 野村又三郎 佐藤 秀雄他
 - 三人片輪 野村又三郎 井上 祐一 井上礼之助 井上松次郎
 - 六月二十一日 観世定式能 加 茂 梅若万三郎 井上祐一
 - 藤 戸 片山博之 佐藤秀雄
 - 葵 上 観世寿夫 佐藤友彦
 - 薩摩守 佐藤卯三郎 井上松次郎 井上礼之助
 - 六月二十八日 宝生定式 突 盛 宝生英雄 自然居士 辰巳 孝
- 編集後記
- 七月五日日曜日恒例の朝日狂言会を実施致します「二本柱」井上松次郎他「文山立」茂山七五三、千之返「法師ケ母」河村丘造、佐藤卯三郎「棒縛」茂山千之返、七五三「小傘」和泉保之他の五番立と素囃子「神舞」田鍋惣太郎、藤田六郎兵衛、鬼頭八郎出演の予定です。詳細は近日発表しますが、皆様の御支援をお願い申し上げます。

司子来市
南茶花池鶴

一町和巴中
九六七五(23)





昭和30年6月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前5/2
 井上重兵衛方 電話1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 株式会社 地上社 電話1196

狂言人語

共同社

一足飛びに来た夏気色、またぶりがえして来る寒波と忙しい初夏です。照りつける陽光にキラキラと緑に輝く青葉は、夏の風物詩に欠くべからざるものでしよう。

朝日狂言会も第六回を迎えて今回は京都茂山七五三、千之両氏の発らつたる躍動美を「文山立」「棒縛」に拝見することに致しました。これに和泉保之、野村又三郎の「小傘」を加え、「三本柱」「文山立」「法師ケ母」「棒縛」「小傘」の五番立て、素囃子「早舞」を加えて先ずは誰方がご覧になつても楽しんでいただける番組と自負しております。皆様、ゆつたりと涼風を入れながらお気軽にご観覧下さいませよう。

六月二十日には、野村又三郎やるまゝの会が、一部二部にかけて行われます。又三郎氏が「釣針」「陰狸」「三人片輪」と独演されます、これもご期待下さい。

六月の催能

六月五日 熱田神宮大祭奉納

六月七日	養老 経政 杜若 阿漕 狸々 独吟 狂言小舞	六月十三日	一謡会 午後四時始 鐘 河村鉦二 西村欽也 二九八 佐藤卯三郎 佐藤友彦
六月十四日	本田秀男来名四十年記念能 午後一時始	六月二十日	やるまゝの会 午後五時半始
六月廿一日	観世会 午始 梅若万 西村欽也 井上祐一	六月廿八日	宝生会定式能 宝生英雄 高安滋郎 佐藤秀雄
六月廿二日	山本博之 高安滋郎 佐藤秀雄 佐藤友彦 高安滋郎	六月廿九日	西村欽也 井上礼之助
六月三十日	井上松次郎 井上礼之助		

狂言解説

謀生種「驚くべき、嘘の名人を負かせてやろうと計つた男だが、又々打負かされた。その嘘の出処が謀生の種があるためだといわれて又まんまとだまされる。

二九八「妻乞いの男、西門の角にとの夢の告げで、そこに立つ女の住居を聞く「我が宿は春の日ながらみこし路の風の当らぬ里と問うべし」といわれ「春日なる宿とは聞けど室町の角よりしてはいくつなるらん」と返歌し「お二九」といわれて、二九十八軒目と合点したがさて迎えた妻は……。

三人片輪「仕合せを仕直さうと有徳人の片端者を召かかえるとの高札に片端者に化けて乗り込んだが、留守の内に酒盛りを初め、主人の帰宅でさあ大変、各々とりちがえて追込まれる。

釣針「大名と太郎冠者、申妻をして神変不思議の釣針を授かる。女房共を

狂言弁当

野村 広二

今年も春、興福寺の辨能(たきぎのお)が五月十一、十二の両日おこなわれた。本年も招かれていて、行けなかつたが、大藏弥太郎氏の話によると、初日は天気が危ぶまれていたが、雨もなく、催された由。春日の水、谷川忠麿氏、堀川雅堂氏存命の、まだ三月に演ぜられた頃、いまは病氣養生中の三宅裏氏や沼艸両、北岸佐吉、多田侑史の各氏と古都をたづね、「呪師(しゆし)走りの儀」のあと、春光をあ

釣らんものと釣糸をたれたらばかかるわ、かかるわ、さて妻と決めた女は……。

陰狸「狸捕りの上手な太郎冠者捕つた狸を主に内緒で市へ売らんとするが、主はこれを先廻りして市でパツタリ、さて狸をどうかくすかが問題でしょう……。

薩摩守「路銀の心細い旅僧、神崎の渡しを徒足で渡ろうとす。茶屋気の毒がつて秀句好きの舟頭故と、秀句を教える。さて船中で、平家の公達、薩摩守までは出たがその後の心、ただのりが出ぬので……。

磁石「江州見付の宿から出た男、人買いにだまされ鳥目百疋で売られる。この男はじけた男で宿の亭主より百疋を人買の代りに受取つて逃げる。人買刀を持つて追かける。追付かれた男、いきなり大口開いて刀をのもうと、いさよその結末は。

大衆能 (第一部)

昭和三十九年八月二十三日 午後一時
於 文化講堂

辰巳 孝

能 經政 高安 滋郎 河村總一郎 藤田六郎兵衛

能 雷 井上礼之助 佐藤卯三郎

能 柴田初太郎 吉田 定男 鬼頭 八郎

能 狸々 高安 守彦 田鍋 洋一 藤田 昭彦

(第二部) 午後三時半始

能 養老 和島富太郎 寛 敏一 鬼頭 八郎

能 片岡 道子 豊島三千春 大塚 一二三 青木 恒治 大森英三郎

能 小督 西村 弘敬 福井啓次郎 鬼頭 季信

能 世英 羽衣 福井 道子 山本光次郎

能 弱法師 柴田初太郎

能 蚊相撲 井上松次郎 井上 祐一 佐藤 秀雄

能 忠度 觀世 喜之 西尾孫太郎 金森 準三

能 太田重次郎 佐藤 太俊 吉田 定男 野崎 太郎

能 卷絹 西村 欽也 田鍋 惣一郎 寛 敏一 三男

能 世英 藤戸 今井幾三郎

能 殺生石 辰巳 孝 河村總一郎 助川 竜夫

能 絃上 桜間 竜馬 田鍋 洋一 藤田六郎兵衛

能 内藤 泰二 明宏 河村總一郎 鬼頭喜太郎

能 舟弁慶 高安 滋郎 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

能 高安 守彦 後藤孝一郎 小島鉄次郎

主催 能楽協会名古屋支部
後援 愛知県教育委員会
名古屋教育委員会
普及能後援会
朝日新聞社

びて、わらび餅をたべた思い出がなつかしい。来年はぜひたづねたい。四月から五月の狂言は、「二千石」(保之、松次郎)が筆頭、「種酒」(保之、松次郎)、「若菜」(秀雄)、「若菜」(保之、秀雄ほか)のできもまづまづのできたが、観世物故者追善能の狂言勢は充実していて気持がよかつた。狂言にくらべ能は、数段とおもしろかつた。なかでも「卒都婆小町」(六郎)は傑作、「弱法師」(英雄)、「道成寺」(辰巳孝)も秀逸だつた。観世元正の「松風」は、固い、端正な、重厚さのあるできで、後姿にもすぎがなく、自分のすすむべき道を一筋はつきりさせた感じだつた。さて、狂言でもそうだが、能

もやさしい作品を見事に演じて、感謝をほしいままにするのも、一つの楽しみであるけれど、いわゆるむつかしい曲も、年に、一、二回はみせてもらつて、見物席もともども、くるしみ、心洗われる機会をもちたい。そういつた後の花折、土蜘蛛、石橋といつた曲もまた印象に残るものです。次は、NHKの謡曲、狂言の時間(ラジオ、第二、前八・〇〇)が一時間になつたことをお知らせしたい。そうなつて聞もなく、古い愛好家のM氏から「熊野」(金剛巖)がとてよかつたと伝えられたが、「大原御幸」(喜多実)も充実していたし、「観猿」(万蔵ほか)、「宗論」(弥太郎、圭五郎)の二番立もききこたえあつた。また一中節の「道成寺」(NHK)もめづらしかつた。本では、「近鉄」(五月号)の薪能の衆徒(僧兵)の話、「わが遍歴時代」(三島由紀夫)のなかにおさめられた「大原御幸」の随筆、「考えるヒント」(小林秀雄)の文芸批評の原理の文章が目をついた。六月には金春流「碓」(本田秀男)の復曲上演がある。同氏の来名四十年記念にまわれるのだが、金春流と名古屋は昔から深いつながりのあることは周知のとおり。故桜馬弓川氏も生前「名古屋と金春流とは実に縁故が深いございます」と述懐されていた。本田秀男の芸は、きたえぬかれた芸に、安心してみられる芸。聞、せしかもやわらか味をたえた芸。一美しさと道」を

事務用品・印刷
算盤製造卸

各官衙・学校・会社納入

株式会社 鬼頭商会

名古屋市中村区上笹島町1ノ47 電話 1847~1848番

味到させる芸です。儀式にも平服にも着用できる麻生地といつてよいでしょう。所演の「清経、巴、通小町、黒塚、道成寺、狸々」など、みな忘れがたい。狂言よりむしろ能が、近い将来の展開へつながるうとする情熱と誇り高さに、かえつてあえて、低迷するとき、真の能の姿に接することのできるわづかなシテの一人。名古屋でも数々の演能を希望したい。「碓」は楽しみである。七月は「朝日狂言会」、八月は「大衆普及能」。そして秋を迎える。話題の多い今後を待とう。

近 江 八 景

西村 弘 敬

昔から琵琶湖周辺の名勝を近江八景としてたたへられておる。この八景という事は、元来唐土(元の支那今の中国)に瀟湘(しやうしやうはつけい)と謂われる名勝があつたのを、我が国でもこれになぞらへて琵琶湖周辺に真似(まね)て拵らえたものと思われる。その唐土の八景とは次の通りで。

山市晴嵐(さんしせいらん)

漁村夕照(ぎよそんのゆうしやう)

江天暮雪(こうてんのぼせつ)

煙寺晚鐘(えんじのばんしやう)

平沙落雁(へいさのらくがん)

遠浦帰帆(えんぽのきはん)

瀟湘夜雨(しやうしやうのよるのあめ)

洞庭秋月(どうていしやうげつ)

以上八つの景色を定めたもので、これは謡曲の乱曲近江八景の文章にもこ

れ笑。消息がうかがえるのである。さて我が国で拵へた近江八景にはそれぞれに、その景を読み込んだ和歌があるので、これをご披露する。

○唐崎の夜雨(からさきのよるのあめ)

よるの雨に音をゆづりて夕風を

よそにぞ立つる唐崎の松

石山の秋月(いしやまのあきのつき)

石山やにほの海てる月影は

○三井の晚鐘(みいのばんしやう)

思うそのあかつき契るはじめぞと

まづきく三井の入相のかね

○矢走の帰帆(やばせのきはん)

真帆ひいて矢走にかへる舟は今

打出の浜をあとのおい風

○粟津の晴嵐(あわづのせいらん)

雲はらふ嵐につれて百舟も

干ふねも波のあわづにぞよる

○勢多の夕照(せたのゆうしやう)

露しぐれも山近くすぎ来つつ

夕日のわたる勢多の長はし

○比良の暮雪(ひらのぼせつ)

雪はるる比良の高根の夕ぐれに

花のさかりにすぐる春かな

○堅田の落雁(かただのらくがん)

峯あまた越えて越路にまづ近き

堅田になびきおつるかりがね

以上が近江八景の歌である。猶ついでながらこの琵琶湖南岸に近き有名な鏡山(かがみやま)をよんだ大友黒主の歌がある。

鏡山いざ立よりて見て行かん

年へぬる身は老いやしぬると

第六回朝日狂言会

井九年七月五日午後二時始

熱田神宮 能 楽 殿

素囃子

早舞

鬼頭 八郎

吉田 定男

田鍋 太郎

藤田 六郎兵衛

三本柱

井上松次郎

井上礼之助

大野弘一

井上祐一

文山立

茂山千之丞

茂山七五三

河村丘造

法師ケ母

佐藤卯三郎

河村丘造

狂言小舞

和泉保之

和泉保之

和泉保之

井上礼之助

河村丘造

野村又三郎

佐藤秀雄

井上礼之助

大野弘一

井上祐一

「小傘」について

狂言 共同社

主催 朝日新聞社
狂言 共同社

七月の朝日狂言会に珍らしく小傘が和泉保之、野村又三郎の顔合せで出ております。この狂言については当地ではほとんどご覧の方は少ないと思えますので概留の説明を申し上げてみようと思存じます。

この狂言は大体坊主狂言ですが、本来は(スツパ)盗人狂言でしようか、シテは本当の僧侶でなく博打打のなれ

のはての俄坊主、アドはその譜代召使われる使用人で俄新発意、女房までも打込んで都落ちをする博打打が同宿をつれて歩くのは少々考えられぬ設定であります。が何よりも愉快なのはお経を知らぬ坊主のくせに堂守を志願する可笑しさであります。その為にお経に暗いのをカバーするため南無阿彌陀仏の念仏をつけて小謡をお経らしく唱える即興の踊念仏は際作であります。が、その設定の為の二人の間答がまた仲々愉快であります。

他愛もない連中二人揃って街道を歩く所へ一在所として堂を建立して堂守を探しに出た田舎者が声をかけるので「シテ」愚僧は風に木の葉の散る如しで「ござる」と禪問答よろしく、同道することになります。

これから仏具一式お経迄調つているとの話からこのお経を苦々しいのいらぬ物と云つたことからシテが云訳をします。この云訳が仲々奮つているので

シテ「御不審尤もござる先づ某は小僧の時より学問を励み一切経残らず存じております。師匠が申さるるは後生の為には念仏に上こす事はない、若しお経を続けたらば勘当じやと申されに依つて苦々しい要らぬ物があると申す事でござる」(三宅庄市本)と田舎者を得心させて奈こそ仏具第一と云いますが、このいきさつは。

アド「また見ますれば傘を御用意でござる、あれも何ぞ法事に要りまするか」
 シテ「傘こそ仏具第一の物でござる、それ仏の後に後光というものがある」
 アド「成程御座ります」
 シテ「舟後光或は傘後光などと申して別して法事の時分入用の仏具でござる」

アド「謂をきけば尤でござる……」
 と傘の有難さをまくし立てる。そして入院の仏事を初め亡き人の追善のため布施を出すようにと立衆に強要するのです。それからシテ小アド連れ立つて勤行となりますが、そのうち何とかして布施物をかすめようと、立衆も踊らせる為には踊勤行を初めるのです。

シテ「経説にも聴衆の眼りを覚させようと云事また一つには娑婆で心の浮いた者は仏に成つても心がいさむ、また娑婆で心の浮かぬ者は仏に成つても辛氣、ろうすいやみのような仏に成るによつて且那衆の心をいさめようと云事私も私ではない釈迦の金言でござる。先づこれからは諦念仏じや程にこちの方をみず共皆々立つて踊れ」
 アド「大俗の身で立つて踊つても苦敷うないか」

シテ「下に計り居れば座像の仏に成り、立つ居つ踊りつすればどう成共身の自由な仏に成る事でござる……」(山脇本)
 とところがここに独り踊らぬものが出てシテ、アド共に苦勞することとなりませす。それは夫の追善のため小袖を上げ

た尼であります。最初の一回は踊りませす、その後は上物の前に坐り込んで拜んでいるのです。シテは尼を引のけて布施物をかかえて逃げ出します。同宿は傘で皆からかくしてこれを成功させるのです。

七・八・九月の予告

- 七月五日 朝日狂言会
 - 七月十二日 淡交会 素詣会
 - 七月十九日 邦詣会
 - 七月二十六日 調友会 午後二時始
 - 能 土蜘蛛 大槻秀夫 高安滋郎
 - 小 小原木 井上礼之助
 - 海道下り 井上松次郎
 - 八月一日 協会支部半歌仙会
 - 八月十六日 淡水会 素詣会
 - 八月廿三日 大衆能 於文化講堂
 - 八月三十日 竜吟会 囃子会
 - 九月十三日 竹韻会
 - 能 清経 大槻秀夫
 - 能 江口 梅若猶義
 - 能 山姥 武田太加志
 - 能 佐藤卯三郎
 - 能 佐藤秀雄
 - 能 地蔵舞 野村又三郎 井上松次郎
 - 九月二十日 観世会 素詣会
 - 九月二十三日 松詣会
 - 九月二十七日 婦人師範連合会
- お披露のおしらせ 楽師協議会
- 石島京子 囃子 披 杉村社中
 - 梅若生中 囃子 披 梅若盛義社中

舞 見 中 暑

一	石	藤	長	中	竜	観	霞	潤	観	観	春	高	た	調	名古屋能楽鑑賞会
河村 鉦二	西尾 孫太郎	加藤 良久	鬼頭 八郎	前田 昌広	藤田 六郎兵衛	田鍋 惣太郎	田鍋 惣太郎	林 甲子男	野崎 太一郎	久田 秀雄	片岡 道子	高安 滋郎	田鍋 惣一郎	友会	名古屋能楽鑑賞会

名古屋能楽俱樂部	風韻会	幸友会	金剛流松風社	掬水会	曲水会	金竜会	春鶯会	正楽会	松謡会	清風社	掬水青陽会	名古屋支部	和泉会	狂言共同社
植村 真太郎	殿 島 修二	福井 啓次郎	片野 東四郎	柴田 初太郎	増田 一雄	金 森 準三	山田 仁三郎	加藤 丈太郎	佐藤 謡 太 俊	大塚 一 二	名古屋支部	支部長 田鍋惣太郎	會長 徳川義親	(イロハ順)



狂言人語

共同社同人

涼風立ち初めて、暑さも峠をこした今日此頃、さすがに朝夕しのぎよくなりました。暑さの最中に大蔵流山本東次郎氏の訃報を聞く、その枯れた風格のある芸風と、断固たる伝統保持の態度を以つて狂言界の長老の一人として、斯界の声望をあつめておられたのに、心残りの事です。謹んでお悔み申し上げます。

狂言界も秋を迎えて大きな催を控えております。十一月三日は、共同社先覚者追悼狂言会に井上礼之助氏の「釣狐」の抜き他に「伊文字」「不見不聞」「闇罪人」加うるに、善竹弥五郎、茂山千五郎氏の小舞のお手向けを予定しております。

十一月十四日は、中日狂言名人会、斯界の名人を集めて一部「末広」「新作狂言」「釣狐」「弓矢太郎」二部「舟渡聲」「茶壺」「朝比奈」「唐相撲」の豪華番組、大蔵和泉の名人をもうらしての大会です。

それにつけても、しみじみ山本東次郎氏の訃がおしまれます。

九月の催能

- 九月十三日 大槻退善竹韻会
 - 能清 経 大槻 秀夫 西村 欽也
 - 能江 口 梅若 猶義 西村 欽也
 - 能山 姥 武田太加志 高安 滋郎
 - 能地蔵舞 野村又三郎 井上松次郎
- 九月二十日 観世定式能 素謡会
 - 能竜 田 佐藤 太俊
 - 能 佐藤 秀雄
- 能萩大名 佐藤卯三郎 井上 祐一
- 能 大野 弘之

狂言解説

地蔵舞 大法にて旅人に宿をかす事は出来ぬと断られた僧、笠だけ預かってくれと笠を置いて去って行く。

裏から入った僧が笠をかぶって座敷に座しているのを見て主はとがめるのだが僧は預った笠の台だといふので主はとめる事とする。そこで僧は地蔵舞を見せてお礼に代えるという。

萩大名 無粋の大名、太郎冠者に誘われて萩の見物に行くが、即席で教えられた当座の和歌でマンマと失敗する。

人買いの今

西村 弘 敬

六月の宝生会の能に珍らしく自然居士が上演せられた。この自然居士の能は昔の人買商人(ひとかいあきんど)の事を扱ったもので、都の或る両親の貧しい一少女が人あきんどに身を売ったのを、自然居士が助けに行き連れ戻す為に色々と交渉した様子を作った能である。人買という事は昔から相当広く行われていた様で、昭和の今日でも多少似た様なこと、即ち人集めは行われている。昔の人買商人は一種の職業人で「是は東北方の人あきんどにて候」などと堂々と名乗りをあげて往来したもので、大体東北の文化程度の低い地方では、京都附近その他の文化の比較的高い地方の、然も美しい美少年や美少女などを欲していた為に、人商人が遠く迄も出掛て来て代金又は代物を支払って、引換へに子供を求め連れて行ったのである。然しまたこの中には正当の代金を支払わず内分で見知らぬ様に「かどわかし」として誘拐して盗んで連れて行く不届者も多くあった様で、彼の角田川の能に出て来る子供などは、多分この誘拐にかかった者の様に思われる。また桜川の能では九州日向の国迄子供を求めに行つて常陸の国迄連れて来た様になっている。而してこれ等の少年少女の多くは寺の稚子(ちご)とか花柳の巷などへ売り込んだもの様である。これとは多少趣を

狂言弁当

野村 広 二

今年も暑さきびしい夏であったが、この世界は、各地のたよりが、活発にきかれた。八月、狂言共同社の装束の虫干しが、例年のように、阿弥陀寺であった。二階建てのこの寺がせまいぐらい。まず玄関のところから、足のふみ場もないほど、所せましと並べられた様は景観。いそがしいなかで、先輩

昭和39年9月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5-2
井上重兵衛方 電@1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社 地上社 電@1196

が後輩に、オモチや装束の手入れにしがたい、いろいろと、成功や失敗の経験を語り合ひ、狂言の歴史を伝えていく、稽古と修業のきびしい場であったとおもうと、なぜか暑さを吹きとばす楽しさがこみあげてきた。肩衣になかなかしなれた模様のあるのが、印象に残った。京都では、オモチを打つ人たちの会ができた。面秀会という。同人の伝承の意気を、この春、展覧会で世に問うたが、芸術生活(九月)に、巻頭を飾ってくわしく紹介されているのが目をひいた。さて、山本東次郎氏(大藏流)が、七月二十六日、他界。この訃報は遠國の人たちをおどろかせたにちがいない。一つの古式のなかに、固さとやわらかさをたたえ、正月の膳のごまめのようにしかも大きな鯛の格と味があつた。「八尾」の責め、「靱猿」の大名はよい思い出です。本では、「古典文化の創造」(林屋辰三郎)、報道春秋(四月)の名古屋芸能列伝、金春八左衛門浄元ら(尾崎久弥)、受鑑(六月)の能三章のうち、「一能、フェノロサ、禊木(福原麟太郎)など。故平田禊木氏のこと、英文学夜話(研究社、矢野峰人、三〇、七)の「フェノロサと平田禊木」が必読の文章であることを忘れてはなるまい。秋の多彩の行事が期待される。

糺河原勸進猿楽日記

寛正五年の糺河原勸進猿楽日記によれば次のような狂言が出ています。

初日 三ノ丸長者、サルヒキ、カクレミノ(異本かくれかさ)、ハチタタキ、八幡の前、懐中(異本懐らう) 二日目 ヒケカイトテ(異本鬚やぐら) 蚊、大か小か、鬼のマメ、イモシ、キシヤク(異本ちしゃく) 三日目 三本柱、コヨミ、アサイナハラツツミ、茶カキザトウ(異本茶斤ざとう)、若メ、入間川、馬太カ、見ルムコ(異本なきむこ)、からかさノシコウク(異本傘しやうん)、十番ワラウチ、餅クイ 是等の内現に舞台上に上せているものもあるが最古の狂言本といわれる天正狂言本と校正してみると、初日のサルヒキは、現在の猿座頭であらう。靱猿は天正本に所載されている。二日目のヒケカイトテは現行鬚やぐら蚊は蚊相撲であらう。大か小かは不詳、鬼のマメは節分イモシは天正本にいう「いもぶ関」、キシヤクは「ぎしやく」(天正本) 三日目 コヨミは不詳アサイナは朝比奈であらう馬太カとあるは馬太刀の誤りか、恐らく現在の止動方角であらう。いづれにしても天正本に該当するものが見当たらない。 カラカサノシコウク(異本傘のしやうじやう)とあるのは恐らく傘のしゅうしゅうの誤であらう。十番ワラウチは不詳、現行細ないの事であるまいか。 こうして考察してみると演出方法或は詞に多少の変化があるとしてもよくも保たれて来たものと今更乍ら驚き入るべきである。 一九六四、九

十月の予定

- 十月四日 中部金剛能
 - 能 蟬丸 豊島弥左衛門
 - 能 黒塚 今井茂三郎
 - 能 蜘蛛 佐藤秀雄
- 十月十日 梅鶴会
 - 狂 蜘蛛人 井上松次郎
 - 能 三井寺 梅若猶義
 - 能 熊坂 井上松次郎
 - 能 熊坂 梅若猶義
 - 能 柿山伏 井上礼之助
 - 狂 柿山伏 佐藤秀雄
 - 能 景清 井上礼之助
 - 能 井筒 井上松次郎
 - 能 鶴飼 井上松次郎
 - 狂 引くり 佐藤秀雄
 - 能 引くり 佐藤秀雄
 - 能 引くり 河村丘造
 - 能 引くり 河村丘造
 - 能 菊慈童 河村鉦二
 - 能 松風 柴田 収武
 - 能 須磨源氏 親世 元昭
 - 狂 無布施経 井上松次郎
 - 能 無布施経 名匠鑑賞能
 - 能 無布施経 梅若 六郎
 - 能 恋重荷 佐藤 秀雄
 - 能 恋重荷 親世 喜之
 - 能 葵上 和泉 保之
 - 能 葵上 桜間 竜馬
 - 能 葵上 佐藤卯三郎
 - 能 葵上 和泉 保之
 - 能 葵上 井上松次郎
- お披露のお知らせ 楽師協議会
 - 高田みね子 森勝子 能沢惠美子
 - 右雛子披 梅若猶義社中
 - 穂積元乘 森孝治 坂勝二 吉田章夫
 - 木村栄一 以上素謡披 野村社中
 - 浅野恭子 能小袖曾我 三村恵子 能羽衣
 - 西川貴美子 雛子披 又太郎社中

名菓

登録商標

御千代宝

登録商標

うすらひ

登録商標

桐壺

登録商標

室の梅

登録商標

城で餅

登録商標

夏の霜

中己宅(一丁目)

名菓 楽師協議会

電話(99) 3200、3201、3202、3203、3204、3205



昭和39年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方 電41430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電4881

狂言人語

超大型の台風の訪問に次いでオリ
ピックの祭典が愈々近づきました。
日本の古典としての能楽狂言の秋と
なり此十月十一月は殊に狂言の大会が
相次いで行われます。皆様も此芸術オ
リンピックをぜひ御観賞下さい。

十月の催能

- 十月四日 中部金剛能
 - 能 鰯 丸 豊島弥左エ門 高安 滋郎
 - 能 黒 塚 今井幾三郎 西村 欽也
 - 能 蜘蛛 人 井上松次郎 井上礼之助
 - 十月六日 新城富永神社奉納能
 - 十月十日 梅猶会
 - 能 三井寺 梅若 猶義
 - 能 熊 坂 梅若 盛義
 - 能 柿山伏 佐藤 秀雄 井上松次郎
 - 十月十一日 中部金春会 正十二時半始
 - 能 景 清 前田 昌広 高安 滋郎
 - 能 井 筒 桜間 龍馬 西村 弘敬
 - 能 鵜 飼 本田 秀男 西村 欽也

狂引く

- 十月十八日 榑水青陽会 正后始
 - 能 菊 慈童 河村 鉦二 高安 滋郎
 - 能 松 風 柴田 収武 西村 弘敬
- 能 須磨源氏 観世 元昭 西村 欽也
- 能 無布施経 井上松次郎 佐藤卯三郎
- 十月二十五日 名匠鑑賞能
 - 能 巴 梅若 六郎 福王茂十郎
 - 能 恋重荷 観世 喜之 福王茂十郎
 - 能 葵 上 桜間 龍馬 高安 滋郎
- 能 醉 齋 和泉 保之 井上松次郎

狂言解説

蜘蛛人II 生活苦から盗みに落ちた男
見とがめられて、蜘蛛の巣にかゝる。主
の発句に即妙の下の句を吟じたかの男
小袖や太刀まで拝領して帰ることにな
る。
柿山伏II 柿を盗んで見つけられ大や
罵にまでたとへられた山伏、遂に木の
上から飛び降りて腰を打つ、治療せい
と祈り戻された柿主は山伏を負つて投

げ出す。

引くゝりII 躰よく暇を止された女、
暇の印に袋をもらいこれに入るものな
ら何でも持つて行けとの約束、さて女
房の一番大切なものは何でしたか？
無布施経II 住持毎月のお経に檀家へ
行く。何時も出る布施が今日に限つて
とりまぎれて出ぬ、何とか出ぬ布施を
出させんものと教化に戻つたが……
とんと感の働かぬ旦那に、何とか布施
を思い出させようと四苦八苦する住持
の苦勞を御覧下さい。
醉齋II 物売り狂言とでも名付けるか
醉売とはじかみ売が互に秀句を競ふと
云ふもの。土農工商の内、商業関係隆
昌の時代にとり上げられた狂言らしい
ものです。

糺河原の勸進能

本誌第七十三号に糺河原勸進能に出
た狂言の曲目が出て居たが、私の所持
する古書の内にあるものと少しばかり
相違がある。然しこれはどれが正しい
かは今更判然とし得ないが一応之れを
御目にかける事とする。
人皇第百二代後花園院の御宇
寛正五甲申年 於糺河原勸進能
勸進聖 鞍馬青松院義盛法印
申樂勸進太夫 観世音阿弥 年九十八才
年三十六才
初日 同 又三郎

能相生 狂言 うるまの長者

- 能 八 島 かくれ笠
- 能 三井寺 ざる引
- 能 源氏供養 くち雅
- 能 丹後物狂 くいの中
- 能 丹後物狂 八はたの前

二日目

- 能 鵜 祭 狂言 ひげかひたて
- 能 敦 盛 ぐさま
- 能 山 姥 大か小か
- 能 春 近 鬼の豆
- 能 松 風 伊文字
- 能 自然居士 じしやく
- 能 恋重荷

此山姥演能中に強烈なる地震があつ
たが大した事もなく其まゝ続ひて行は
れた。

三日目

- 能 白楽天 狂言 三本のはしら
- 能 誓願寺 ともみ
- 能 菅王曾我 朝比奈
- 能 二人静 ちやかき座頭
- 能 四位少将 くらつゝみ
- 能 礎 なき鯉
- 能 しきみ天狗 入間川
- 能 杜 若 若和布
- 能 放下僧
- 能 御乞能 名取老女
- 能 養老流

右の通りの番組曲目であるが、此の
内には現今とは名称の変つたものや、
或は現在行はれて居ないものもある様

で、又其時の舞台の図を見ると今日とは全然違ひ橋掛りは真後ろに奥の方へ付けられ舞台の内向つて左の方に太鼓又右手の方が大小座、笛は脇座の次で今の地謡座の辺になり地謡は脇正面の方にあり、見物席は舞台の三方面より円く造られあつた様である。

狂言弁当

野村 広二

九月二五日の台風一過、秋の気配が深くなつた。この頃は身辺多事で、ゆつくりしたくもできなかったが、誰にでもそういう一時期はあるもので、そんないそがしい時は、なほさら、狂言や能がみたいとこがれる気持がつよい。まづ特記したいのは、八月末の大衆能。名古屋勢が近年にない充実振りで、これも、何年かに一度、周期的にめぐつてくる一つの山といえよう。みんな、日頃の努力の成果をよるこびあいたい。九月は、「江口」(猶義)が、実にすばらしかつたの一語につきる。切りのツレの進退に一分のすぎがあつたが、これは蛇足の類かもしれない。そのときの狂言「地蔵舞」(又三郎、松次郎)は、終りがややばつんとした止め方であつてなかつたけれども、全体いや味なく、あれだけ淡々とした味があつたのは、一つの新しい境地である。また八、九月のテレビでは、「熊野」(大坪十喜雄)「葵上、梓之出、無明之祈」(金剛巖)「融、遊曲」(豊島弥左エ

門「一角仙人」(喜多美)。それに山崎正和作のドラマ「世阿弥」(いづれもNHK)。本では、(国語と国文学)(八月号)の「夢幻能の再検討」(金井清光)、文学(九月号)の「大和猿楽と複式夢幻能の成立」(北川忠彦)。これは、能の構成、物真似、幽玄といった世阿弥の芸術理論の根本につながるもので、別にとりあげたい。
一〇月多彩で、「乱、広蓋之式」(巖)ほかみるものが多い。

十一月の予定

十一月一日 九阜会 午前十時	能 碓	伊藤 睦子	能 舟弁慶	堀田 俊	能 仲光	植村真太郎	問 井上松次郎	問 抗か人か	佐藤卯三郎	井上松次郎	十一月三日 井上家追善狂言会	狂 伊文字	和泉 保之	狂 不見不聞	井上松次郎	歌村 秀雄	狂 釣 狐	井上礼之助	井上 祐一	狂 蘭罪人	野村 万蔵	和泉 保之	野村 又三郎	井上松次郎	他	小舞 御田	茂山千五郎	楽阿弥	善竹弥五郎	十一月十四日 中日名人狂言会	狂 末	野村 万蔵	文化講堂	野村 万作	三宅藤九郎
----------------	-----	-------	-------	------	------	-------	---------	--------	-------	-------	----------------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	---	-------	-------	-----	-------	----------------	-----	-------	------	-------	-------

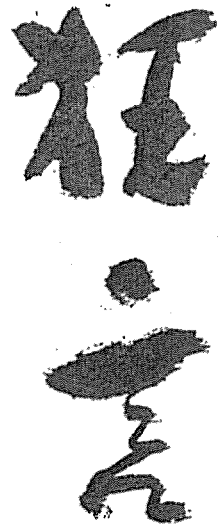
狂 はりこ丸	野村万之丞	茂山千五郎	狂 蝸牛	大藏弥太郎	山本 則寿	狂 釣 狐	茂山千五郎	善竹弥五郎	狂 弓矢太郎	三宅藤九郎	野村 万蔵	野村 万蔵	狂 舟渡御	和泉 保之	三宅藤九郎	野村万之丞	善竹弥五郎	善竹圭五郎	野村 万作	狂 朝比奈	野村 万蔵	茂山千五郎	狂 唐相撲	大藏弥太郎	野村 万蔵	野村 万作	茂山千五郎	他	十一月十五日 観世定式能	能 小 督	武田太加志	能 班 女	梅若 六郎	問 野村又三郎	能 善 界	観世 元昭	問 井上松次郎	狂 粟田口	野村又三郎	井上礼之助	十一月二十二日 掬水会	能 通小町	石田 糸代	能 葵 上	吉田 妙	十一月二十三日 橋岡追善 淡交会	能 誓願寺	岡田 頼允	西村 欽也	能 葵 上	伊藤 長八	高安 滋郎	狂 魚説法	問 佐藤卯三郎	井上礼之助	十一月二十九日 風韻会	能 弱法師	殿島 修二	西村 弘敬	能 二人静	水野 友彦	西村 欽也	能 舟弁慶	近藤 努	高安 滋郎	狂 清 水	問 井上礼之助	佐藤卯三郎	佐藤 秀雄
--------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	---	--------------	-------	-------	-------	-------	---------	-------	-------	---------	-------	-------	-------	-------------	-------	-------	-------	------	------------------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	---------	-------	-------------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	---------	-------	-------



花 甚

直売店 駅前豊田ビル一階 TEL⑤4587
名古屋駅表玄関 TEL⑤9078
温 室 千種区猪高町西一社 TEL⑩0025

東新町電停東 CBC放送局西隣
TEL ②4 0487・529



狂言人語

共同社同人

国を挙げてのオリンピック、狂言界を網羅しての中日名人狂言会、井上追善和泉会と今秋最大の催が重なります。芸事は正統を守つて厳正に行はれる所にこそ人を動かす何者かあるはずで、努力と精進の精華が咲き競ふその舞台、火花を散らすその競演をぜひ御鑑賞下さい。

十一月の催能

十一月一日 九草会 午前十時

能 碓 伊藤 睦子

能 舟 舟慶 堀田 俊

能 仲 光 植村真太郎

能 杭か人か 佐藤卯三郎

十一月三日 井上家追善和泉会

能 伊文字 和泉 保之

能 不見不聞 井上松次郎

能 釣 狐 井上礼之助

能 杭か人か 佐藤卯三郎

能 伊文字 和泉 保之

能 不見不聞 井上松次郎

能 釣 狐 井上礼之助

能 杭か人か 佐藤卯三郎

昭和39年10月1日発行
発行所
名古屋市中区其門前町5/2
井上重兵衛方 電41430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電44881

狂言罪人

小舞 御田

十一月十四日 中日名人狂言会

一部

狂末 広

狂はりこ丸

狂 蝸 牛

狂 釣 狐

狂 弓矢太郎

狂 舟渡賀

狂 茶 壺

狂 朝比奈

能 小 督

能 班 女

能 善 界

能 栗田口

能 通小町

野村 万藏

三宅藤九郎

和泉 保之

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

三宅藤九郎

和泉 保之

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

野村 万藏

狂言解説

杭か人か||人一倍臆病な太郎冠者を

試めさうと一人で留守をさせた主。様

子を見に戻つてみると夜廻りをしてい

る太郎冠者は主の立つているのを杭と

見違える。杭か人かと尋ねて杭と答え

る主に、安心した太郎冠者、フト気が

ついてビックリ、杭が返事をするとは

伊文字||悉しくば聞うてもきませ伊||

とまでは聞いたが後を聞き損つた太郎

冠者、伊の字のついた国の名を歌関を

立て、知らうとする。妻乞いの風景は

泰平の御代らしく誠におほらかです。

不見不聞||聾と盲目、お互に相手をあ

などつて馬鹿にしようとするが、矢張

りいづれは自分に戻つて来る。

釣狐||狂言は猿に初まり狐に終ると

能 葵 上 吉田 勉

能 葵 煉 井上礼之助 佐藤卯三郎

能 葵 願寺 岡田 頼允 西村 欽也

能 葵 上 伊藤 長八 高安 滋郎

能 葵 説法 佐藤 秀雄 井上礼之助

能 葵 法師 殿島 修二 西村 弘敬

能 葵 二人静 水野 西村 欽也

能 葵 舟渡賀 近藤 努 高安 滋雄

能 葵 清 水 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄

まで云はれる大曲。人間が狐に化け

の化けた狐が人間に化ける、その二重

化けの至難な芸を如何に力演するか

にあります。井上礼之助の真剣な努力を

ぜひ御鑑賞下さい。

鬨罪人||裾圍祭を室町時代の人々が

どれほど自分達の最大の楽しみにして

いたか、それによるその当時の打合せ

の種々相、さし出すぎる太郎冠者に手

をやく主、主客転倒のその結末の面白

さ、重厚と軽妙の対比の妙に拍手を期

待します。

末広||あまりにも有名な脇狂言。目

出度い狂言として、その囃子物と共に

人の心をほのぼのした暖かさに包む筋

立てです。

はりこ丸||新作狂言として若手狂言

師三名の芸に期待させよう。

蝸牛||長寿の葉蝸牛をとりこにやられ

た太郎冠者、頭が黒く腰に貝をつけ折

々角を出して藪の中に居るものとだけ

云はれて、藪に寝ていた山伏を連れて

戻る。さてそれからは、

釣狐||当代の名手千五郎氏の白藏主

と名人弥五郎翁の釣手、まづ最高の芸

術をぜひ一人でも多く鑑賞願いたいも

のです。

弓矢太郎||連歌の席で鬼の出る話が

話題になり何時も臆病な癖に威張る太

郎が見に行く事になつた。武悪の面を

つけておそる／＼現場へ調べに行く太

郎を之も面をつけておどそうとする連

歌の連中の一人は互に鬼と思つて失心

する。一刻早く気のついた太郎は、後から来た連中の話で真相を知り鬼になつて追込む。

舟渡舞¹京から舞入りする舞、渡し舟の中で強引に舟頭からゆすられて持参の酒を吞まれて仕舞う。舞が来たと女房に言はれてあの酒を強引に飲ませよとゆすつた男がそれと知つた男の驚き、ひげをそり落した舟頭に気づいた舞さあどうなりますか。

茶壺²宇治へ茶を求めに来た男、つかれて寝ていると連雀の片方へ腕を入れたスツバ茶壺をとらんと秘術をつくす。目代が出たものゝ、本人の云うを聞いてそのまゝ受け売りするスツバに手をやくが……。

朝比奈³地獄のえんま、不況に耐えかね六道の辻で罪人待つ処へ、来たも来たり朝比奈三郎義秀とは、和田軍さの物語りに散々手玉にとられたえんまはついに七ツ道具を持つて極楽送りとは。

唐相撲⁴唐の王様につかえる日本人帰朝の挨拶に一手と云はれ取りもつたり下人三十余名を投げとばす、遂にたまりかねて出た王様さへ投げとばして目出度く日本へかえる。

粟田口⁵大名粟田口の説明を読んで粟田口を手に入れようと太郎冠者を使に出す。スツバが粟田口は人の事と云ふを真に受けて連れて帰るを書き物と合はせようとす主、刀と人を如何に合はせ得るか、スツバの返事の面白

さ、トンチンカンがそのまゝ通る大名のうつけさは……。

魚説法⁶檀家から法談を頼まれたものゝ老師が留守で代りに出た新発智法談、魚の名づくしとは……。

清水⁷野中の清水へ水を汲みに出た太郎冠者、鬼が出たといつわつて帰つたものの再び出かける主に鬼の身代りをするしかし、声がよく似たと感づかれてまんまと失敗。

狂言弁当

野村 広二

十月はいい能を沢山みた。また十月はオリピックの月。その「芸術界」に能と狂言が参加したことはいうまでもない。昔、ギリシャでおこなわれたときも、競技のほかに、文学・芸術の庭で、いろいろの催しが、あわせもたれたとのこと。名古屋から、田鍋老先生、高安、藤田の三氏が、出勤のため上京されたが、そのはれやかなみやげ話はまだうかがっていない。乗物と街なかの混雑を敬遠して、「翁」（鎖之丞）と「二人大名」（万之丞、万作、又三郎）をラジオできき、「綾鼓」（乾三）「邯鄲、傘之出」（得三）、新作能「鑑真和上」の写真（木村伊兵衛）をカamerateレビ（いずれもNHK）でみて、わづかに見物への渴望をいやした「オリピックで能をみにきました。」……つて知人の家をたづねた

ら、さぞかし笑話になるであろうとおもつたりした。開会式もカラーでみたが、あのふんい気には、狂言や能に通ずるものがたしかにあつたようだ。さて、本では、報道春秋（九、十月号）に共同社の先輩伊勢門水物語（伝記、尾崎久弥）。「書齋のない家」福原麟太郎に「世阿弥生誕六百年」ほかのエッセイ、「往還の記」（竹内寛子）に「幽玄、花、余情など」（第七章）があり、画では、能の「井筒」をえがく「河内通いの二人の女」（院展、新井勝利）が印象深かった。

十一月の共同社は井上道善狂言会、そのあとに中日狂言会がある。狂言界各先輩の冥福と盛会を祈りたい。

十二月の予定

十二月六日 乱能
十二月十三日 宝生定式

編集後記

オリピックの一九六四年も世界の賞讃を浴びて終了、記念演能も最初の出だしは少々宣伝不足の感があつたものの優秀の効果を挙げて目出度く日本の伝統芸術を披露し終つて御同慶にたえません。来春は又々一月から「道成寺」梅若盛義氏、五月「源太夫」本田秀男氏、等の演能予定が山積して芸術の華開らく春を予想されます。狂言界もこれにおくれをとらじと目下計画中です。御期待下さい。

何と云つても
ますはん
お茶は升半

創業天保十二年
石女屋・松坂屋

■本店 名古屋市中区伝馬町五 ■駅前店 大名古屋ビル地下街 ■売店 松坂屋〈地階〉名物街園